

ガイム

みなぎし
すい

【人物一覧表】

櫛 美藍（6）（12）（15）∴女

子高生

前谷 葉月（6）（12）（15）∴

美藍の幼馴染

櫛 太一（40）∴父

櫛 夕（38）∴母

羽場 律夫（15）∴クラスメイト

浜名 葵（15）∴クラスメイト

田中 博（15）∴クラスメイト

高橋 武（15）∴クラスメイト

鈴木 和歌子（13）（25）∴担任

の先生

翔子∴陰陽師の女子高生

早苗先生∴保健の先生

黄泉様∴神

○ 学校・1階廊下（夜）

警備員 A、懐中電灯を持って廊下を歩いている。

どこから聞こえてくる唸り声。

警備員 A「なんだ？ 誰かいるのか？」

警備員、足を早める。

コツコツとペースが早くなっていく。

教室の扉が開いている。

警備員 A「誰だ？ 早く帰りなさい――」

警備員、息をのむ。

足を掴まれる警備員。

警備員 A「うわあああああああ！ ぐああ

あああ……」

扉と窓に、血が飛び散る。

教室に、黒いもやが充満する。

○（回想）前谷宅・庭

T「9年前」

樫美藍（6）と前谷葉月（6）、バド

ミントンをしている。

羽が地面に落ちる。

笑顔で葉月にてちてちと駆け寄る美藍。

葉月「みあちゃ、みあちゃ」

互いに駆け寄り、ぴとつとくつつく。

美藍「えへへ、たのしい」

葉月「ねー！　ずっとずうっと、ともだちで

いようね！　だーいすきだよ！」

美藍「うん！」

葉月の表情がさらにぱあっと明るくなる。

美藍N「私たちは、ずっとずうっと親友だ。

いつだって、どこでだって。この幸せが永

遠（とわ）に続きますように……」

（回想終わり）

○ 樸宅・外観（朝）

T「現在」

ちゅんちゅんと、雀が鳴いている。

○ 樸宅・美藍の部屋（朝）

美藍（15）、学校に行く準備をして
いる。

カバンに筆記用具と化粧アイテム、自
由帳、ミカンを入れた袋を入れる。

インターホンの音が鳴る。美藍、顔を
あげる。

○榎宅・居間（朝）

美藍「いってきまーす！」

夕「いってらっしゃい、もう葉月（はづき）

ちゃん外で待ってるよ」

美藍「うん！」

榎夕（38）、皿洗いをしながら美藍
に声をかける。美藍、にこっと笑顔に
なる。

○榎宅前（朝）

美藍「行こっか」

葉月「うん！」

2人、歩き出す。

○学校・校門（朝）

ざわざわと、生徒たちの声がする。

美藍と葉月、手をつなぎながら歩いて
いる。

美藍 N「きつと、いっしょのクラスになれる。

なれなくたって、ずっとずっと親友なのは
変わらない。大大好きな親友と、一緒に
いたい」

○同・1の1教室（朝）

美藍「えへへ」

美藍、席に座り、ニコニコしながら自

由帳に絵を描いている。

葉月「何描いてるの？」

葉月、自由帳を覗く。

美藍「2人！」

葉月「えへへ」

2人、満面の笑顔。

羽場律夫（15）「よう」

律夫、2人に挨拶。

美藍「おは」

葉月「おはよ」

2人、挨拶を返す。

浜名葵（15）「なに、知り合い？」

律夫「中学同じ。言わなかったか？」

葵「へえ。それよりさ、律夫。この地域の噂のこと知ってる？」

律夫、葉月を見ている。

律夫「さあ」

葵「なんでも、この街の神社には黄泉様っていう神様がいて、なんでも手順を踏むと願いを叶えてくれるんだってよ！」

律夫「お前ほんとにそういう変な都市伝説好きだよな」

律夫、呆れた顔になる。

高橋武（15）「それおれも知ってるぜ、なんかミスると鬼に食われるっつー話だろ？」

なんか、警備員が1人消えたって。でも、黄泉様ってうちの学校の地下とかじゃなか

った？」

田中博（15）「なんかミスる、とは不明瞭ですね。噂の場所もバラバラ」

その会話を遠くから聞いている美藍と

葉月。

葉月「願いが叶うって。何願う？」

美藍「叶ってるからいらない。だって、葉月いるもん！」

美藍、葉月に笑顔を向ける。

葉月「……うん」

葉月、どこかさみしそうな表情になる。

○通学路

美藍、ミカンの皮をむき、葉月に手渡す。

葉月。ミカンを1房口に放り込む。

葉月「ね、部活は何部入るの？」

葉月、前を向きながら美藍に聞く。

美藍「決まってるでしょ、バド部！」

美藍、葉月に笑顔を向ける。

葉月「あーね」

○（回想）小学校体育館

女教師「それじゃあ、ダブルスのペアとチー

ム名決めてね！」

体操服を着た生徒たちが、体育座りして女教師の方を向いている。

美藍（１２）「葉月！ ペアなろ！」

葉月（１２）「うん！」

２人、笑顔で向き合う。

葉月「どうする？ チーム名」

美藍「ガйм、はどう？」

葉月「いいねっ！」

２人、女教師にチーム名を報告。

女教師「前谷さんと櫟さんは、チームガйм

ね」

（回想終わり）

○通学路

葉月「ふふっ、美藍らしい」

葉月、くすりと笑う。

美藍「あはは、まあね」

美藍、ミカン1房を口に放り込む。

美藍「行こ！」

葉月「うん」

2人、笑顔で走り出す。

美藍N「私たちは、ずっと親友……この時は
まだそう思ってた」

○学校・1の1教室

葉月「ごめん、私ダンス部に入ることにした
の」

葉月、申し訳なさそうな表情で謝る。

美藍「なんで」

葉月「……」

律夫、教室に入ってくる。

葵「律夫、おまえ前谷に告ってOKしたのか

よ？ 中学ん時から好きだったのか？」

男子A「一目ぼれだってよ」

葵「まじか」

クラスがざわざわしている。

葉月「あ、羽場くん」

葉月、律夫のもとへ駆け寄る。律夫と向かい合う葉月。

クラスメイトたちがざわざわしている。

美藍「葉月……」

葉月「美藍」

葉月、美藍の方を向く。

美藍、言葉が上手く出ない。

美藍「……おめでと！」

美藍、葉月に笑顔を向ける。

律夫「葉月……一緒に帰る？」

葉月「あ……」

美藍「……」

沈黙が流れる。

葉月「あ、うん……」

美藍「え……」

美藍、立ち尽くす。

葉月「美藍」

美藍「おめでと！」

美藍、笑顔を作る。

葉月「いいの？」

美藍「怒るところ何もないじゃん！ ダンス部も、羽場くんに入りたいんでしょ？」

葉月「う、うん」

美藍「幸せになってね！」

葉月と律夫、教室を出る。

それを見ている女子たち。

女子A「なにあれ、ひど」

女子B「2人、羽場くんとは中学一緒なんでしょ？ 羽場くんイケメンだし、樫さんも

羽場くん好きだったかもしれないのに」

女子C「樫さん、ああいうのは縁切った方がいいよ」

美藍「え」

女子C「まじで。それか……黄泉様、使っちゃえば？ 噂って案外バカにならないかもよ？」

女子たち、にやりと笑う。

美藍「黄泉様……」

※ ※ ※

(フラッシュ)

葉月、申し訳なさそうな表情で謝る。

※ ※ ※

美藍「葉月」

美藍の目が鋭くなる。

扉を開け、早苗先生が顔を出す。

早苗先生「樫さん、ちよつと来て」

早苗先生、美藍に向かって手招きする。

○学校・保健室

扉を開け、美藍の中に入る。

早苗先生「樫さん、少し頼みがあるのだけれ

ど」

美藍「はい、いいですよ」

早苗先生「もし誰かが困っていたら、助けて

あげて」

美藍「はあ、いいですけど、どうして私に」

早苗先生「あなたが、優しい人だと思ったか

ら」

美藍「……わかりました」

早苗先生「それと。この花、どう見える？」

早苗先生、一輪の花を取り出す。

美藍「綺麗な花です。種類はわからないので
生物の先生に聞いてください」

早苗先生「そう。ありがとう」

美藍「はい。それでは、失礼しました」

美藍、お辞儀をして職員室を出る。

○神社（夕方）

風が吹き、木の葉が舞う。

美藍、賽銭箱の前に立つ。

美藍「……」

美藍、神社の鈴を見つめ、

美藍「黄泉様黄泉様、もしましたら姿を表
してください」

手を2回叩く。

美藍「ま、いるわけないか」

振り向き歩き出そうとする美藍。

黄泉様「あら、願いを言わなくていいの？」

声をかけられ、その方向を見る美藍。

そこにたたずむ、人の見た目をした黄

泉様。

美藍「え……ええええ！？」

美藍、驚いてしりもちをつく。

美藍「いった……ちよちよ、ちよつと待つて

……まじで黄泉様？」

美藍、目をこする。

黄泉様「そうよ……あなた、他と少し違うの
ね」

黄泉様、美藍に向けて不敵な笑みを浮かべる。

美藍「え？」

黄泉様「で、願いは何？」

美藍「えつと……前谷葉月を」

※ ※ ※

（フラッシュ）

美藍と葉月の、たくさんの楽しい思い出

出

※ ※ ※

美藍「いえ、やっぱり願いはありません」

黄泉様、少し目を見開く。

黄泉様「ないのかしら？」

美藍「ひどいことには使いたくなくて……ごめんなさい。えっと、今のちゃんとキャンセルされましたか？」

黄泉様「ええ、キャンセルね。願いの無理強いはしないわ。それじゃあまた、いつでも呼んでね」

黄泉様、姿を消す。

美藍、きびすを返す。

○ 櫟宅・美藍の部屋（夕方）

美藍「こ、怖かったあ……なんかミスってないよね？」

美藍、椅子に座り勉強机に自由帳を広げる。そこに描かれている、葉月と美藍が笑っている絵。

美藍「葉月……祝ってあげないと」

美藍、目を細める。

○学校・（夜）

暗い部屋。

警備員、服を脱ぐ。

警備員 B 「い、入れるぞ……」

警備員の視線の先に、女の影。

警備員の体に、黒いもやが巻きついていく。

警備員 B 「あ、う、うわあああああああ！」

○同・1の1教室

授業中。

美藍、机につっぷしている。それを心配そうに眺める葉月。

○同・体育館（夕方）

美藍、バドミントン部の練習中。

得点板の係をしている。

美藍 M 「あれから、葉月と話すことがほとんどなくなった」

美藍「祝ってあげないと……」

女子部員「樸さん、得点」

美藍「あ、ごめん」

美藍、慌てて得点をめくる。

○学校・1の1教室（朝）

鈴木和歌子（25）「高橋くん、田中くん、

羽場くん、浜名くんが家に帰っていません」

和歌子の一言に、ざわざわするクラス。

女子A「絶対前谷さんがやったでしょ、黄泉様で」

女子B「あれ、じゃあなんで羽場くんがいない
くなってるの？」

女子A「どっちにしろ許せないって！ 羽場
くんと付き合ったんだとしても、消したん
だとしてもさ！ いや、連れ去ったんじゃないの？」

陰口を叩く女子たち。

女子C「もう、絶対無視無視！」

美藍「そんな……」

○陰陽省・和室

翔子、和室に座っている。

T「翔子 陰陽師」

翔子「近くの学校で警備員が消えた……これ
鬼が来たってことっしょ？ 近隣で、同様
の行方不明事件が多発してる……まじやば」

翔子、長い髪をかきあげる。

○学校・1の1教室

各々が弁当を食べていたり談笑したり
している。

葉月、扉を開けて教室の中に入ってくる。
る。

葉月「……え」

葉月が自分の机を見る。そこには大量
のゴミが散乱している。

女子A「羽場くんどこやったのよ」

女子D「そうよ！」

女子B「あんたがやったんでしょ！？ 羽場

くんたちどこにやったの？」

葉月「違う！ 私はやってな」

女子B、葉月を思いつき叩く。

葉月、床に手をついて倒れる。

葉月「み、美藍……」

葉月、美藍を見上げる。

女子B「櫟さん、いい気味でしょ」

美藍「……」

美藍、黙り込む。

女子A「行こ。ほら、お前も来るんだよ」

女子たち、葉月を無理やり連れて教室から出ていく。

美藍M「……くそっ！ こんなんで、ずっと仲いい幼馴染だなんて言えないよ……」

美藍、立ち尽くし、下を向いて拳をぎゅっと握る。

○同・体育館裏

葉月、女子たちに髪や服を引っ張られて
ている。

それを陰から見ている美藍。

美藍 M 「ひどい……なんでみんなこんなことが
できるの」

何回も叩かれ、葉月の体にあざができ
ている。

女子 A 「前谷さん。警備員さんが行方不明に
なった話は知ってるよね？」

女子 A 、葉月の胸ぐらを掴んで起き上
がらせる。

女子 A 「今日の夜、学校に残って自分のスマ
ホからティックトックでライブ配信して。
それで、鬼の映像を撮ってきて」

掴んだ胸ぐらを離す。

女子 A 「アカウントは貸してあげるから。指
示に従って。余計な事したらどうなってる
かわかってるよね？」

葉月 「は、はい……」

女子 A 、ニヤリと笑う。

女子たち、葉月を置いてその場を去る。

葉月。ぺたりと座り込む。

美藍、その場を立ち去る。

早苗先生「大丈夫？」

早苗先生、葉月に声をかける。

早苗先生「手当するわ」

○学校・保健室

早苗先生、葉月の手当をしている。

早苗先生「はい、できたわ」

葉月「あ、ありがとうございます……」

早苗先生「大丈夫？」

葉月「だ、大丈夫です……あんまり先生のとこにいますといじめられる……」

葉月、立ち去る。

○同・1の1教室

和歌子「それじゃあ、みなさん気を付けて帰ってね。行方不明者が出てるから、できる人は大人数で」

帰りの挨拶をし、そろそろと帰る生徒たち。

葉月、教室を出る。美藍、それを目で追う。

和歌子、あたりを見回し、

和歌子「樫さん、ちょっと待っててくれる？」

小声で言葉を発する。

しばらくして人がほとんどいなくなつた頃。

和歌子「来て」

○同・職員室（夕方）

職員室。教師たちが仕事をしている。

隅の椅子に座り、机をはさんで向かい

合っている美藍と和歌子。

和歌子「これで、クラスの女子たちには見つ

かってないわね。それで本題なんだけど、

樫さん、前谷さんとお友達よね？」

美藍「……」

和歌子「心配しないで、ここの会話は絶対秘

密にするわ」

美藍「はい……」

和歌子「前谷さん、いじめられているのよね？
その原因は何かかったりしない？」

美藍「言えません……プライバシーに関わりますので……」

美藍、視線を逸らす。

和歌子「少しでも言えない？」

美藍「……ある人と仲良くしてたから、その嫉妬からだと思います」

和歌子「ありがとう、よく話してくれたわね。

先生が言いたいのは、前谷さんがこまっていたら、樫さんが助けてあげてほしいってこと」

美藍「……」

和歌子「もちろん難しいとは思うけど……私も働きかけるから。だけど、樫さんがいちばん前谷さんを助けられるの」

美藍「あ……」

○（回想）前谷宅・庭

幼い2人、バドミントンをしている。

美藍「えへへ、たのしい」

葉月「ねー！　ずっとずうっと、ともだちで
いようね！　だーいすきだよ！」

美藍「うん！」

（回想終わり）

○学校・職員室（夕方）

美藍「あ、葉月……葉月！　ごめん、ごめん
ね……！」

美藍、ぼろぼろと涙を流す。

和歌子「樫さん、お友達のために泣けるなんて
優しいのね」

美藍「あ、ひぐっ……」

和歌子「私ね、昔友達がいじめられていた
の。だからそういう人を少しでも減らした
くて教師になった」

※ ※ ※

（フラッシュ）

和歌子（13）、クラスメイトにいじ
められている友達を悲しそうに見てい

る。

※ ※ ※

和歌子「樫さんは、人のために泣ける優しい心を持つてる。だから、こんどは人のために怒れる強い人になって。決して無理はしないで、でも、自分がどうしたいのかをよく考えて」

和歌子、優しく語りかける。

美藍「はい……」

和歌子「それじゃ、お疲れ。また明日ね。早く帰ること」

美藍「はい……」

○同・2階廊下（夕方）

美藍「失礼しました」

美藍、お辞儀をしてゆっくり職員室の扉を閉める。

美藍M「私がなんとかしないと……葉月は学校のどこかに隠れているはず」

美藍、歩き出す。

○同・職員室（夕方）

和歌子、書類整理をしている。

早苗先生「和歌子、お疲れ」

早苗先生、缶コーヒーを渡す。

和歌子「それここで飲んじゃよくないよ。それは置いといて、まあいじめがなくなってくれればいいんだけど、苦勞するよ」

早苗先生「私も、いじめはなくなつてほしいわ。そのために教師になつたから」

和歌子「同じ」

早苗先生「やっぱり、気が合うね！」

早苗、和歌子に笑顔を見せる。

和歌子「本当ね、早苗！」

笑顔で向き合う2人。

和歌子「2人で、いじめをなくさなきゃ」

早苗先生「うん！」

○学校・地下室（夕方）

地下室の奥の通路から響いてくるうめ

き声。

ペタペタとする足音。

鉄格子の前に立つ鬼。地下室の入口扉をじっと見つめる。

○同・正門（夕方）

制服姿の翔子、正門近くから学校を見渡す。

翔子「うち高校生だし、ここの制服着れば入れるよね。にしても……この学校、邪気すごすぎな？」

翔子、懐のおふだを触る。

翔子「よし、おけまる水産」

美藍「コンビニ近かったよね？ 早くいかないと」

翔子の横を、美藍が通り過ぎる。

○同・1階トイレ（夜）

個室で震えている葉月。

葉月「う、ううっ……こわいよ……」

葉月、スマホを見る。

LINEに、女子Aから詳細な指示が送られてきている。

葉月「や、やらなきゃ……」

葉月、ティックトックを起動する。

鬼がトイレ入口をくぐる。

まぶたをパチパチさせながら歩く。

ペタペタと足音が近づいてくる。

葉月「ひっ」

バタンと、扉が開閉される音。葉月、

びくっとして声を出す。

個室の下の隙間から影がのそく。

葉月M「ひいっ！ まさか、鬼？ ほ、本当にいたの？」

葉月、息をのむ。

心臓の鼓動が早くなる。

ペタペタとする足音が遠くなっていく。

それから、1分弱待つ。

葉月「い、行った？」

葉月、個室の鍵に手をかける。

美藍の声「ここは？　ここはいないかな？」

葉月「美藍、美藍なの？」

美藍「葉月！」

葉月、おそるおそる個室の扉を開ける。

美藍「葉月！　よかった！　見つけた！」

葉月「あ……美藍！　怖かったよ！　怖かつ

たよおおおお……」

2人、抱き合う。

○同・1階廊下（夜）

2人、廊下を歩いている。

美藍、おにぎりとパンがいくつか入った袋を持っている。

美藍「ごめん、ごめんね……いっぱい思いさせちゃって」

葉月「こっちこそ、ごめんね……」

美藍「ううん、いいの」

美藍、涙を浮かべながらにっこりと笑う。

美藍「助けてあげられなくてごめん。そのテ

イックトックの配信、やらされてるんだよね」

葉月「うん……あ、そうだ！ さっき鬼に遭遇しなかった？」

美藍「え？ 見なかったけど、どうして？」

葉月「さっき個室にいる時、人っぽくない足

音が聞こえて……」

美藍「え、大丈夫？ 隠れた方がいいんじゃない。

とりあえず、美術室に行こ」

葉月「なんでそこ？」

美藍「あ……武器があるから？」

○同・美術室（夜）

扉を開け、中に入る。

美藍「え？」

美藍の視線の先に、縄でとらわれている人がいる。行方不明の男子4人と、和歌子、早苗先生。

美藍「みんな！ 大丈夫？ 先生も大丈夫ですか？」

美藍、駆け寄る。

美藍「みんな、どうしてここに？　とにかくこれ食べて！　特に4人は！　それとこれ水筒！　男子、間接とか今は気にしないで！　あんまり食べ過ぎないでね」

美藍、急いで袋からパンとおにぎりを取り出す。

4人、それを食べる。

武「なんでこんなの持ってたんだよ、ここにいらってわかったのか？」

美藍「そんなわけではないでしょ。えっと……葉月を探るのが遅れて学校に閉じ込められたら嫌だと思ったから」

葉月「美藍……ありがとう」

葉月、美藍を見つめる。

律夫「た、助かった……前谷さん、なに撮影してるんだ？」

葉月「あ、これは女子たちから、鬼を見つけて撮ってこいって言われて、ライブ配信しなきゃいけない……」

律夫「なんだそれ、許せねえ」

律夫、拳をぎゅつと握る。

美藍、美術室の道具を切る。

美藍「ふう、硬い……」

美藍、息を切らして床にへたり込む。

4人の男子と2人の先生、立ち上がる

武「助かったぜ！」

博「ありがとうございます」

葵「なんでここに？」

美藍「葉月を探しに來ただけだよ」

早苗先生「それじゃ、みんな帰りましょう。」

前谷さんも、帰りなさい」

葉月「あ……」

葉月、呆然とする。

美藍「ここは従おう葉月。大丈夫、誰かがい

じめてきても。私がずっと一緒にいるから」

葉月「あ、ありがとう」

○同・校舎入口（夜）

下駄箱で靴を履き替える一行。

早苗先生「さ、出ましょう」

早苗先生、扉の取っ手に手をかける。

早苗先生「お、おかしいわ！」

早苗先生、取っ手を掴んで激しく押し

引きする。

早苗先生「開かない！」

和歌子「嘘！？」

律夫「ちよつと待て、出れないのか？」

博「あまり大声を出さない方がいいです、疲れ
れます」

律夫「お、おう」

一行、静かになる。

早苗先生「他の出口を探しましょう。いざとな
ったら私の責任で、ガラスを破壊して出
るわ」

○同・1階廊下（夜）

8人、廊下を歩いている。

和歌子「待って、足音がする」

先頭の和歌子、腕を横に出して歩みを

止める。

角から姿をあらわしたのは、翔子。

翔子「え、まだ人いたん？」

翔子、目を見開く。

翔子「こんなとこで何してんの？ 危ないから早く出た方がええよ」

和歌子「どういうこと？ あなたここの生徒だよね？ こんなところで何してるの？」

翔子、深呼吸をし、

翔子「うち、陰陽師やってんの。それでこの学校には邪気があって、だからはよ出た方がええよ。鬼が出るって噂、聞いたことあるっしょ？ ここ、鬼が出んの」

8人に向かって喋る。

和歌子「よくわからないけど、ここから出れないの。下駄箱のところ」

翔子「まじ？」

和歌子「ええ」

翔子「そうなんや……これはやば——」

上の階から、何かが崩れる音が鳴る。

武「うわ！」

武、驚く。

武「な、なんなんだよ……鬼ってなんなんだよ！ 殺される！ うわああああ」

武、走り出す。

翔子「待って！」

美藍「高橋くん！」

○同・2階廊下（夜）

階段をのぼりきる武。

武「あ……」

武の目の前にたたずむ鬼。

○同・1階廊下（夜）

武の声「うわあああああああ！」

翔子「やばい！ 鬼に遭遇した！」

○同・2階廊下（夜）

階段をのぼりきる一行。

廊下に響く咀嚼音。

武が、鬼に食べられている。

翔子「間に合わなかった……うちが恐怖をあ

おったせいだ」

翔子、齒ぎしりして拳を握る。

律夫「う、うわあああああああ！」

博「こんなものが実在したというのですか……

……？」

葉月「いやあああああああ！」

悲鳴があがる。

和歌子「ひいっ……」

翔子「逃げるよ！」

一行、走り出す。

律夫「うわあっ！」

律夫、葉月を突き飛ばす。

葉月「あっ！」

葉月、こける。

美藍「葉月！」

美藍、葉月に駆け寄る。

鬼、葉月と美藍の方を向く。

翔子2人をかばうように立ちふさがり、

他は逃げる。

翔子「は！」

翔子、お札を持った腕を鬼に向けて突き出す。

お札、焼ききれる。

翔子「くっ！　今の力のないうちじゃこいつらに対抗できない！」

葉月「羽場くん……」

翔子「みんなのもとに行くよ！」

○同・1の1教室（夜）

扉の前に机でバリケードが作られている。

葵「武が、殺された……嘘だろ？」

葵、震えている。

暗い部屋で、暗い雰囲気。

美藍「ねえ、羽場くん」

律夫「なな、なんだ？」

美藍「さつき、葉月突き飛ばしたよね？」

美藍、律夫に静かな怒りの表情を向け、

律夫「あ。あれは」

美藍「ふざけないで！」

ぐっと胸ぐらを掴む。

美藍「葉月の彼氏なんでしょ！？　なんであんなことしたの！」

思いつきり叫ぶ。

律夫「叫んだら鬼が来るだろうが」

美藍「あんたが、あんたが葉月に告ったせいで葉月は！」

葉月、胸ぐらを掴んだ状態から律夫を投げる。

美藍「葉月は女子たちからいじめられた！」

律夫「八つ当たりすんなよそんなつまらないことで！」

美藍「今なんて……？」

美藍、堪忍袋の緒が切れる。

美藍「くそが！」

美藍、思いつきり律夫を殴る。

美藍「みんなが葉月を嫌っても、せめてお前だけは葉月のそばにいろよ！」

響いて聞こえるくらいの声量。

葉月 M 「こんなに怒る美藍初めて見た」

美藍、掴んでいる胸ぐらを離す。

美藍 「葉月は、私の大切な幼馴染なのに……

！」

和歌子 「落ち着いて」

美藍 「嫌だ！ それに、大切な人のために怒れって言ったのは先生でしょ！」

和歌子 「そうだけど、今はみんなのために落ち着いて」

美藍 「こいつのために？」

和歌子 「樫さん、いまの樫さんは周りが見えなくなってる。羽場くんのためじゃなくて、みんなのために落ち着いて」

和歌子、諭すように言う。

美藍、呆然とする。瞳から光がなくなる。

美藍 「はは……そうなんだ……もういいよ……

……」

絶望したように、扉に手をかける。

葉月「美藍……」

葉月、美藍に抱きつく。

葉月「ありがとう……大好きだから」

美藍「葉月」

美藍の瞳に光が戻る。

葉月、抱きつきをやめて離れる。

翔子「今のうちの力じゃどうにも……」

翔子がそう言った時、思いつき扉が叩かれる。

翔子「鬼だ！」

ドンドンと扉が「叩かれている。

葉月「いや、死にたくない死にたくない死にたくない」

美藍「葉月！　大丈夫だから……」

葉月「震えてるよ……」

美藍「葉月は私がまも」

けたたましい音が鳴り、扉が破られる。

鬼、唸り8人のほうを見る。

翔子「やばい！　バリケードが仇に！」

翔子、鬼が破った方と逆のバリケード

を見る。

律夫・博・葵「あ、ああ……うわあああああ

あああ！」

男3人、叫ぶ。女5人、男3人を見る。

男たちの体がゆがんでいく。

女5人、悲鳴をあげる。

男たち、鬼になる。

和歌子「挟まれた！」

早苗先生「どうするの！？ 陰陽師さん！」

翔子「え、やばやばやば……どうしよどうし

よどうしよ」

葉月「美藍！」

美藍「いやだいやだいやだ死にたくない死に
たくない死にたくない」

4体の鬼が、5人に迫る。

和歌子「み、みんな……私が……私が囿にな
るから、逃げて」

美藍「先生！」

和歌子「早く！」

和歌子、大きく声を張る。

美藍「……！」

鬼たち、和歌子に向かってじりじり迫る。

翔子、早苗先生、美藍、葉月、外に出る。

○同・1階廊下（夜）

4人、走っている。

葉月「はぁ、はぁ、はぁ」

葉月、息を切らして座り込む。

美藍「葉月！」

美藍、葉月に駆け寄る。

葉月「い、痛い……」

葉月、苦しそうな表情をする。

早苗先生「……いじめっ子に暴行されてたところ

が痛んです」

美藍「どうすれば！ 食べ物はまだあるけど

救急道具なんて持ってない……」

翔子「くそっ！ うちに力があれば……」

美藍「……あ、もしかしたらなんとかするか

も」

翔子「どうしたん？」

美藍の方を向く3人。

○（回想）同・1の1教室（朝）

武「でも、黄泉様ってうちの学校の地下とか
じゃなかった？」

（回想終わり）

○同・1階廊下（夜）

美藍「黄泉様の噂にはもう1つあって……地
下室の奥に行けば黄泉様に会えるかも！

私実は黄泉様に会ってて、その時は何も言
わなかったけど、噂の信憑性は高いと思う」

早苗先生「ならその可能性に賭けてみよう！

楳さん！」

美藍「はい！」

美藍、うなずく。

○同・地下室（夜）

階段を降り、電気がついている地下室に
来た4人。

葉月「はあ、はあ、はあ」

美藍「葉月！ 手掴んで！」

美藍、葉月に手を差し伸べる。

葉月「あ、ありがと……」

早苗先生「でも、どこにあるの？ 黄泉様の
出現場所なんて」

美藍「噂が正しければ、この奥です」

美藍、扉が開いている鉄格子を指さす。
その向こうには、暗く長い通路が見え
る。

翔子「でもどうする気？」

美藍「私が……どんな代償を負ってでも、み
んなを助ける。時間を戻す。きっと神なら
そんなくらい簡単にできる」

美藍、表情をきりつとさせる。

葉月「でも、それじゃ同じことが起こるだけ
じゃ」

美藍「ここの9人全員の記憶を引き継ぐ。た

ぶん、『5人を生き返らせて』『9人を脱

出』だと願いが2個になっちゃうかもしれないから、今思いつくのはこれくらいしか」

葉月「でも、黄泉様って噂だと代償が！ 願

いが叶ったら、代償もきつとある！」

美藍「葉月。私の願いは、葉月が楽しく生きること。やり直して、羽場くんと付き合わないようにすれはいいよ」

美藍、葉月に笑顔を向ける。

早苗先生、再び懐中電灯をつける。

○同・地下最奥（夜）

たどり着いた場所の床には魔法陣が描かれており、仏壇がある。

美藍「ま、魔法陣に仏壇！ 絶対ここだ！」

美藍、仏壇の前に立つ。

美藍「黄泉様黄泉様、もしいましたら姿を表してください」

美藍、必死に言葉を発する。

黄泉様、姿を表す。

黄泉様「こんばんは。また会ったわね、2人とも」

美藍「え？」

通路から、鬼が走ってくる。

美藍「あ！先生後ろ！鬼が！」

さらに早苗先生に迫る鬼。

美藍「先生！」

翔子「いや、これは……」

翔子、鬼と早苗先生を見つける。

鬼、早苗先生の横に立つ。

翔子「たぶん。この人が……黒幕。鬼を操つてたのもこの人」

美藍「え？」

葉月「嘘……」

早苗先生「そうよ……」

十数秒の沈黙が流れる。

美藍「先生……どうして」

早苗先生「いじめられて死んだ友達を、生き返らせるためよ」

早苗先生、美藍たちをじっと見つめる。

早苗先生「私はもともと親が両方犯罪者でいじめられていた。そんなわたしにも優しい友達ができた。でも、私と仲良くした友達にはみんないじめられた。小中高と噂が広まって、死んだ友達合計で5人。そんなある時、黄泉様の噂を知った」

美藍「先生」

早苗先生「願いを叶えると黄泉様はその人の大切なものをとっていくと。それで、私は黄泉様から鬼を操る力を授かった。黄泉様は、鬼で食べたぶんだけ生き返らせてくれると言った。だから、警備員を鬼で食べたり鬼に変えたりしながら、時を待った。5人っていうのは、1人食った警備員と、4人の男子生徒。男子生徒たちには、私がしてあげるって言ったら簡単についてきた。そして……」

早苗先生、美藍に向かって指をさす。

早苗先生「櫟さんに鬼の素質があると知って、協力者になってもらうために花粉をふり

まき、操った」

早苗先生の体から伸びる植物。

早苗先生「これは、素質がないと黒いもやに見えるんだって。質問くらいだったら黄泉様が答えてくれてね」

美藍「え？」

○（回想）同・保健室

早苗先生「それと。この花、どう見える？」

早苗先生、一輪の花を取り出す。

美藍「綺麗な花です」

美藍に向かって、気づかないくらい小さな花粉が飛んでいく。

○同・1階廊下（夜）

鬼、トイレから出る。美藍とすれ違う。

美藍、まるで見えていないかのように、鬼を気にもとめない。

○同・1階廊下（夜）

美藍「え、大丈夫？ 隠れた方がいいんじゃない。

とりあえず、美術室に行こ」

（回想終わり）

○同・地下室最奥（夜）

美藍「いつの間に」

早苗先生「記憶すらも操れるから、そのくらい簡単」

美藍「私が特別な体質……」

○（回想）神社（夕方）

黄泉様「そうよ……あなた、他と少し違うのね」

黄泉様、美藍に向けて不敵な笑みを浮かべる。

（回想終わり）

○学校・地下最奥（夜）

美藍「あの時」

黄泉様「そう、あの時特別って言ったのは、

そういうこと」

早苗先生「あなたたちは、あのエロガキたちと違っていい子ばかりで気に入ったから殺さなか」

和歌子「早苗！」

早苗先生の言葉を遮るように、

美藍、葉月、翔子が声のした方を振り向く。

美藍「先生生きて……なんで」

早苗先生「あの時のフリ。私と同じ目標を持ってたから生かした」

和歌子「早苗！　こんなことをしても、殺された友達には喜ばない！」

早苗先生「でも」

葉月「先生、私のこと手当してくれたじゃないですか！　そんな優しい先生がなんでこんなこと！」

葉月、手当された腕を見せる。

葉月「そんなことしなくても、生徒たちは先生のことに慕ってるじゃないですか！　先生

は優しい先生じゃないですか！」

早苗先生「私は、取り戻すんだ。友達を」

和歌子「早苗！　あなたがいちばんいじめの

つらさを、人に牙を向けられるつらさを、

人のやさしさを知ってるはずでしょ！」

和歌子、渾身の声量で叫ぶ。

早苗先生「あ……」

※ ※ ※

（フラッシュ）

思い出される、友との楽しい記憶。

※ ※ ※

早苗先生、膝をつく。

早苗先生「わ、私は取り返しをつかない過ち

を……」

早苗先生、ボロボロと涙を流す。

美藍「やり直しましょう、先生」

黄泉様「泣いているところ悪いけど、鬼が食

べた魂はどうするの？」

早苗先生「どの選択肢がどうなるんですか」

黄泉様「あなたに、今ここで願いを選ばせて

あげる。一つは、食った人間を生き返らせて、あなたが鬼にした人間ももとに戻す。もう一つは、望み通りお友達を生き返らせてあげる。どちらの選択肢でも、私が力を使うのだから代償は払ってもらう」

少しの間。

黄泉様「サービスとして、まだ払っていない前回の願いの代償をこの願いの代償だけで払ったことにしてあげるし、ここにいる人とあなたが殺した人、その関係者に代償の流れ弾がいかないようにしてあげる。さあ、どちらかを選びなさい」

黄泉様の言葉のち、十数秒の沈黙が流れる。

早苗先生「私は……」

早苗先生、黄泉様をじっと見つめ、

早苗先生「私が殺したみんなを生き返らせる方を選ぶ」

和歌子「早苗……」

○病院・駐車場

T「1カ月後」

駐車場に停まる車。

扉が開き、和歌子が出てくる。

○病院・入口

和歌子、自動ドアを開けて中に入る。

○病院・病室

早苗先生が、意識がない状態で呼吸器をつけられてベッドに寝かされている。

扉が開き。和歌子入室。

和歌子、ベッド横の椅子に座る。

和歌子「交通事故に遭って入院なんてね。こ

れが代償かあ……」

和歌子、早苗先生の顔を眺める。

和歌子「でも、目覚めるまでずっと待ってる

から」

和歌子、窓から空を見上げる。

○陰陽省・縁側

翔子「人間って、やっぱ自分で幸せを掴めるんだ。帰ろ、友達が待ってるし。フェスとか行きたいな」

翔子、その場から立ち上がる。

○学校・1の1教室

葉月「羽場くん」

律夫「……おう」

立っている律夫、席に座っている葉月。

葉月「もう近寄らないで。あと、あの日あったこと喋ってないよね？」

律夫「……おう」

律夫、席に座る。

武「律夫と葉月、破局したってよ！」

美藍N「クラスは、葉月と羽場くんの破局のことでもちきりだ」

葉月「美藍、今日放課後、うち来て」

○前谷宅・庭（夕方）

綺麗な夕暮れが空を染めている。

葉月「私、バド部に変えた」

美藍「そうなんだ！　よかった！」

美藍、葉月に抱きつく。

葉月、美藍をはがす。

葉月「それでね、美藍に言いたいことがあるの。実はね、羽場くんのこと別に好きじゃなかったの」

美藍「な、なんで？　え？」

葉月「美藍から離れるためにわざとやってたの」

美藍「離れる？　なんでよ」

葉月「あのね、美藍がきれいなんじゃないの。でも、女の子どうしって変な目で見られるから、勇気が出なくて、遠くにしようとしちゃったの」

美藍「えっと、つまり……？」

葉月「でも、勇気出して言うね……私ね……」

美藍のことが好きだったの」

美藍「え……」

しばらくの沈黙。

美藍 「ええええええええええ！？」

大きな声で驚く美藍。

美藍 「えええつと、その……」

美藍、あたふたする。

葉月「ずっとずっと、大好きで。でも、怖くて」

美藍「葉月」

葉月 「どう……かな」

葉月、恥ずかしそうにしている。

美藍 「そんなの……断る理由ないじゃん！」

これからも、大好きだから！」

美藍、涙を流しながらにつこり笑う。

葉月 「うれしい……！ これからも、ずうつ

と一緒だね！」

○大きな体育館

T
「
1
0
年
後
」

男「優勝は、樫選手と前谷選手ゝッ！」

観客「わあああああああああああ！」

客席から巻き起こる大歓声。

男「優勝おめでとうございます！ お二人は
ガймと名乗って活動なされている幼馴染
ということですが、何か秘訣でもあるので
しょうか？」

男にマイクを向けらえる美藍と葉月。

葉月「それは、美藍とここまでがんばれてこ
れたからです。ガймは、幼いころに部活
のダブルスでつけた名前なんです」

男「樸選手はいかがでしょうか？」

美藍「はい、葉月と同じです。私たち2人で
いるかぎり、ずっとずうっと、ガймはど
こまでも頑張れますから」

葉月「へへっ！」

美藍と葉月、満面の笑顔でハイタッチ
を交わす。